

更 地

私は ここにいた。

蟻の大群は白い体操着

背中丸めて 陽射しに焼かれ

うつむいたまま

唇 真一文字

這いつくばつた

グラウンド

無数に散らばる灰色小石を

つまみ上げ 捨て

また

つまみ上げ 捨て・・・

果てない労役

「体育祭前だ！

ひと粒残さずしつかり拾え！

わかつてんか お前ら！」

ふんぞり返ったスピーカーは

吹木文音
ふぶきあやね

ニヤケて嬲つてご満悦

蟻たちの唇が歪む

ちらちら横目で獲物を物色

ヒソヒソヒタヒタ・・・

血祭りにする

「転校生！」

「転校生・・・」

「転・校・生」

私に名前なんてなかつた
居場所求めて

唇ギリギリ・・・血が滲む

灼熱の無言行

一五の子供は残酷で
一五は大人で冷酷だ

一五の私のプライドだつていっぱし。

黙して

隠して

日常、淡々。

ガラスの靴で爪先立つて
血まみれのまま
まことしやかな笑顔を浮かべる

それが

悲しい一五の美学

ひたすら透明を願つた全身

なのに

指先は

埃と小石と殺した涙で

薄汚れていった

拭うことも

洗うことも

許されなかつた・・・あの日々。

遙かに時を隔てて

ここは

呆気ないほどちっぽけで
ぞつとするよな口開けて
濁つて濁んでとぐろしている

更地／証明写真／蛇

夕暮れ時の
街の喧騒。

無言地獄は四角に括られ
取り残されて平然だ。

私はここで叩き込まれた
「碎けるまで歯を喰い縛れ！」

「人は孤独だ、身勝手だ！」

「いいか

窒息しても生きてゆかねばならぬのだ！」

哀しい学びの原点は
この

死に損ないの都会の更地よ
血まみれ無惨な教場よ

一五の私は這い出せた

だから きっと

これからも。

秋に

更地は

ショッピングタウンになるそつな。

証明写真

吹木文音

何心なく腰かけて
髪を撫で 上目遣い
唇結んで

正面見据え

精一杯 弓を引く

それなのに……

ぽとり吐かれたシートには
母が

私の母が焼かれてた

人生 延々嘆き節

家族の団居まどいを拒む人

悲劇のヒロイン七〇有余年

私には両親がいなかつた私は親の愛を知らない
だから愛し方がわからない

お母さんの気持ちをわかつてくれるのは
あの子だけそうあの白いイスだけよ

壊れたテープレコーダーは

更地／証明写真／蛇

家族を黙らせ バラバラにした

月日は母を怪物にした！

歪つて醜い母のリアルよ

疎んじ 遠ざけ

ああはなるまい……

爪先立ちを強いてきた

哀しい母よ

私の顔に なぜ宿る

証明写真。

いつたい何を証明してるので

渴いた冬の昼下がり

カタカタぐらつく丸椅子残し

茫然 私は外に出る

新しい息 吸うのも忘れ

ブーツの爪先 泣き出した

娘の面影 手繰り寄せ

途方に暮れて

青い空

あの子の毒にはなりたくない
笑顔の翳りに墮ちたくはない
ねえ

辿る道は やっぱり同じ？

白い陽射しが一気に暗転

私の中の母の証明

焼き印された薄いシートに
どうしようもない闇 わらう

蛇

吹木文音

蛇が冷たい舌を出す

よくも裂いたな返せ　返せ……

よくも裂いたな返せ　返せ……

十数年

団居まどいを見据える　陰々滅々

蛇よ

お前の欲するその男

過去だ過去だと　鼻で嘲笑わらつて

あんな奴をと　吐き捨ててるぞ

お前の欲ほど

空疎なものなどないのだ　蛇よ

目をつぶり　絞り出す

消え去れ消え去れ　消え去れ

蛇よ

終わりなき暗闘

更地／証明写真／蛇

叩き割られた夫婦茶碗
セピア色

碎け散つた粉々に
たらりたらたら
指先染めて
つぎはぎつぎはぎ

重ねた夜よ

過去だ過去だと 切り捨てられて

行き場を失くし

極まる惨め

痛苦の果てに

真実を知る

よくも裂いたな返せ 返せ！

止むことのない重低音
耳を塞いで 鏡を見れば
荒んだ目をした
蛇は我。

蛇よ

蛇 蛇……

哀しいお前の正体は
私に宿る アンビバレンス
踏みしだかれた
想いの化身か

過去にできない

痛切か

蛇 よ

蛇 蛇……

眠れぬか……